

## 鉛筆の持ち方

「話す・書く」活動を大切にされた校内研究に学校をあげて取り組んでいて、研究授業が毎日のように行われている。どの授業も新たなチャレンジがあり、うれしくもあり頼もしくもある。

授業を見ていて子どもたちの鉛筆の持ち方が気になった。鉛筆は親指と人差し指の先で持ち、それを中指で支えるのが正しい持ち方だが、親指の腹で押さえていたり、握りしめていたりする子が多くいる。技能の発達ということから言えば、低学年では間違った持ち方をしている、高学年になるにつれて正しく持てるようになるはずだけれども、かえって高学年の子どもたちの方に問題があるように思う。

保育園の先生から聞いた話だけれども、鉛筆の握り方はお箸の握り方と共通するのだそうだ。二本持ったお箸の下側を取って一本にすると鉛筆の握り方になるという。幼児は、最初はお箸は使えなくて、スプーンでご飯を食べる。スプーンを握りしめて食べているのを親指と人差し指でつまんで持てるようにするまでにずいぶん時間がかかるという。それをお箸に持ち替え、鉛筆の握り方に応用することで鉛筆を正しく持てるようになる。一年生では、鉛筆に練習用具をつけていることもあってほとんどの子が正しく持てている。それがなぜ学年が進むにつれて癖のある持ち方をするようになるのだろう。

「わたしたちがあれほど時間をかけて正しく持てるようにしたのに。」と高学年の授業を見てその保育園の先生はつらかった。子どもたちは正しく持てないのではなく、我々が声をかけないために、正しく持とうと言う意識が薄れ、めいめいが好きなように持っているように思える。「正しく持とう。」と声をかければ正しく持てるのではないか。

茶碗の持ち方とか椅子の座り方とかほうきの使い方とか、このようなことはよく起きる。一度身に付いたことも意識しないと習ったことを忘れてしまう。鉛筆の持ち方だけでなく、小学生の子どもたちが何気なくできていることの多くが、家庭や保育園や幼稚園の努力によるものだと意識して指導にあたることが大切だとも思う。

